

外国人のみた日本 -- 我が家の日本の母（カルチャー・ショック）

著者	Abdul Waheed [著], 真田 孝之 [訳]
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	168
発行年	2009-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004690

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Abdul Waheed
出身地：パキスタン
所属：カラチ大学
日本滞在：2009年4月～10月

今回は二度目の日本滞在になる。前回とは家族と名古屋に五年間滞在した。初来日したときは家族皆、孤独感を味わった。名古屋の街を歩きながらもお年寄りの顔に我々の両親の面影を求めていた。時が経ち私も妻も父親を亡くした。滞在五年目に引越越しをした。そのマンションに年の頃七〇ぐらしいの女性が私たちの世話を焼いてくれた。彼女の顔に実の母の面影を見いだした。我々は彼女が日本での母のように思えた。彼女のふるまいを見ると、彼女もともに暮らす家族をさがしている風なのだ。旦那が亡くなつてから七年も一人暮らしを続けてきた。二三日一緒にいて、彼女は私にとってとても親切な母、家内には義理の母、そして息子達には祖母（おばあちゃん）に出会ったような気持ちになった。毎日部屋でテーブルを囲んで、話をするようになった。名古屋のいろいろなところと一緒に訪れた。彼女をのぞき皆外国人なので街で会う人は我々を見てびっくりした様子だった。我々の関係を尋ねてくる人もいた。そういうときはいつも「この人は私の息子でこの子らは孫なのよ」と彼女は誇らしげに答えたものだ。我々にもうひとり赤ん坊が誕生したときも孫が三人になったといつて非常に喜んでくれた。妻が入院している間、二人の息子のために料理を作ったり日本の昔話を聞かせてくれたり組み立ておもちゃな

どで部屋で遊んでくれた。うまれた赤ん坊もおばあちゃんになつき、抱っこされるととても喜んだ。おばあちゃんの誕生日は、私たちのアパートでお祝いをするにした。贈り物を買ひ、家内はパキスタンのお菓子と料理を作った。部屋に招き入れるととてもおどろいた様子だった。自分の誕生日を覚えていてお祝いしてくれたことがとても嬉しかったようだ。ケーキを切っていると、彼女が目には涙をためているのがわかった。日本の生活でこの日は彼女にとっても私の家族にとっても一番幸せな日であった。パキスタンに帰ったあとも電話で連絡をとりあった。子ども達もビデオや写真をながめ続けた。そのうち親戚や友達の間でも彼女は有名になってしまった。二年後、アジア研の客員研究員になる機会を得られたと知ったとき、即座に日本の母にまた六ヶ月滞在できることを伝えた。このニュースに彼女は喜んだ。あと何日すれば日本にいくかを指折り数えた。そしてまた日本にやってきた。でも、今度は名古屋でなく千葉である。来た日にすぐ電話し住所を伝えた。ゴールデンウィーク中に千葉に来るとのこと。連休初日にアパートで再会した。孫達特に一番下の子が大きくなったのに驚いていた。かれらは一目見るなりそれがおばあちゃんであるとわかったようだ。彼女は孫達に声をかけたが、彼らは日本語を忘れてしまっていた。この光景はちょっと奇妙な

我が家の日本の母

アブドウル・ワヒード

ものだった。おばあちゃんと孫達は、かつてはなんでも話し合えた仲だったのに、今は言葉ではなく気持ちだけで通じ合っているのだ。日本の母は、四日間我々が彼女のために用意した部屋に泊まった。昼間は千葉や東京の見物をし、夜はくつろいで遅くまでおしゃべりに興じた。四日間はあつという間に過ぎ去り、連休の終わりに名古屋にもどつていった。いまでも三、四日おきには毎日電話で話している。母国の実の母もふくめ家族全員が日本の母のことは知っているし、おばあちゃんも我々一同のことを知っている。双方合つて話がしたいと思つている。難しいことかもしれないが、できないことではないと信じている。

（海外客員研究員／訳 真田孝之）



おばあちゃん（中央）と一緒に（幕張にて）